

活動報告 「引又宿を訪ねよう」

記 大野 孝

活動日 2025年10月2日

参加者 24名

集合 新秋津駅 9:30⇒乗車 9:34⇒志木駅着 9:55

行程 志木駅東口から像前 10:10⇒①井下田翁碑②水車と野火止用水③朝日屋原薬局④西川家潛り門⑤いろは樋⑥宗岡の利水と治水 12:00

猛暑の夏も漸く下火になり外歩きに適した日和の10月2日「志木のまち案内人の会」

6名の方々の丁寧な説明を受けながら、約3Kmの上記コースを歩きました。

① 駅東口広場前には大きなカッパの像があります。新河岸川・柳瀬川・荒川の3川が流れ、水が豊かな土地のためカッパ伝説があり、市内あちこちに名前のついたカッパ像が立っています。広場脇には井下田慶十郎翁の碑があります。翁は回漕問屋の16代当主でしたが、舟運の衰退と陸運の将来を見通して鉄道業に積極的に参画しました。東上鉄道誘致の最大の功労者が翁であり、このため戒名は「交通院慶運東上居士」となっています。所沢飛行場誘致の功労者が向山小平次であったように、時代の変革期には有力者の先見的な行動が後世に多大な影響を及ぼしています。

② 水車と野火止用水

野火止用水は川越城主の松平伊豆守信綱が1655年、玉川上水を分水して作らせました。現在の本町通り（昔の市場通り）には昭和40年に暗渠となるまで、野火止用水が流れ潤していました。おかげでこの地域の人々は飲料水・農業用水に困らなくなり、用水を「伊豆殿ぼり」とよびました。本日は往時の用水を偲びながら本町通りを進みました。

引又宿の用水には、3台の水車（上の水車、中の水車、下の水車）が設置されており、用途は主に精米と製粉が中心で、杵の数10本を備えたかなり大規模なものでした。ただ、用水は飲料に使用されるので、水車での作業が水の汚染を引き起こさない様、厳しく管理されていました。



上の水車跡

③ 朝日屋原薬局

本町通りを更に北上した右側に、国の登録有形文化財に指定された朝日屋原薬局の店舗建物があります。店舗前には大きな道標（レプリカ）があり、次の記載があります。正面側は「大和田



朝日屋原薬局と道標(左端)

町へ三拾五町拾八間」「浦和町へ貳里拾三町六間」、右側に「川越町へ四里三町三拾貳間壹尺」「大井村へ壹里三拾四町拾壹間」「膝折村へ壹里九町四拾壹間貳尺」。

記載された地名の内、大和田⇒新座市、大井⇒ふじみの市、膝折⇒朝霞市に現存しています。道標が示すように、引又はこの地方の商業の中心地として「町場」を形成していました。

*町場の要素Ⅰ 【河岸場】

「新河岸川の舟運開始時期は 1638 年川越大火の後」が定説となっている。類焼した川越東照宮再建のため従来運用中の荒川よりも新河岸川を改修したため、より大量の貨物運搬が可能となつた。貨物を取扱う回漕問屋は明治 10 年頃、三上七郎右衛門と井下田藤左衛門の両家が競っており、引又河岸に所属していた船は 17 艘とみられる。貨物の主は年貢米の江戸への出荷で他に八王子・青梅の織物、薪炭、安松の壁土など、入荷では糠、藁灰、塩、醤油、酒類などであった。米の出荷量は引又が 25490 石で新河岸川筋の他の河岸場を圧倒していた。

*町場の要素Ⅱ 【市場】

引又市が本格化したのは川越大火の後、舟運が整備された 1647 年以後と考えられる。1655 年には野火止用水が開通し、後背地の生産力が増大すると余剰農産物を売り生活必需品を買う、需要が高まったと思われる。明治初期の取扱品の内訳は日用品、肥料、呉服、古着、農機具などを購入し自分が生産する茶、蚕糸、繭、甘藷、織物などを販売した。市場は月 6 回開かれる六斎市、野火止用水が市場付近では通りの真ん中を流れ、その両側の街道上でぎやかに開かれた。商圈は徒歩片道約 3 時間で、往復半日が利用範囲で、所沢方面では柳瀬村、清瀬村辺りではないか。

*町場の要素Ⅲ 【宿場】

奥州街道（日光街道）と甲州街道を繋ぐ脇往還としての役割。

大名等高貴な人が通行することは稀だったので、本陣・脇本陣などの本格的な宿泊施設はなかつた。庶民が利用する旅籠屋・木賃宿についても資料がないが、慶応 4 年の高崎侯奥方一行が宿泊した記録によれば人足が 2 軒に宿泊、明治 35 年には 4 軒が営業していた。

④ 西川家潜り門

この門は、西川家（本町 2 丁目）の中庭に建てられていたが、取り壊される予定のため解体しこの場所に移築復元したものです。建築年代は 1866 年頃で、武州一揆の襲撃を受けた際の傷跡が扉や柱に残っています。西川家は幕末には酒造業、水車業、肥料商を営み引又町の組頭役を務めた名家です。

⑤ いろは樋

1662 年宗岡の領主岡部氏が家臣の白井武左衛門に命じて、新河岸川に流れ落ちていた野火止用水を宗岡でも利用可能にするため、川を渡す大きな木製の樋を作らせました。船が通行できるよう水面から約 4.5M の高さに架けられ、樋を 48 枚つなげたので「いろは樋」と呼ばれ長さは約 260M ありました。明治 31 年（1898 年）からの工事により樋は川の下を通す鉄管（ベルギー製）に代わり、現存する「大榦」は深谷のレンガ製になりました。



いろは樋の大榦

⑥ 宗岡の利水と治水

宗岡は荒川と新河岸川にはさまれ、大正以前は頻繁に水害に見舞われました。このため色々な対策を実施しました。

***佃堤** いろは樋を作った白井武左衛門は荒川の堤防と新河岸川の堤防を結ぶ 1217M の堤防を作りました。この堤の高さをめぐっては、高くしたい宗岡側と低くしたい南畠側で江戸時代に何度も対立がありました。

***宗岡総囲堤** 宗岡村は佃堤、荒川堤、新河岸川堤のほか 3 堤に囲まれ村全体が堤で囲まれた輪中集落となっていました。

***水塚** 水害に備えて母屋より高く土盛りした上に建てられた避難用の建物と土盛りのことをいいます。大水の時はこの中で生活でき、また多くの家には避難用の船が備えられていました。

***樋門** 用水の排水のため堤防の下を通して作った水路に設けられた水門です。杣（いり）、杣樋、門樋とも言います。普段は水門を開けて水を通り、増水時は門を閉めて水の侵入を防ぎます。

報告は以上ですが今回の「引又宿を訪ねよう」の活動に際し、「志木のまち案内人の会」6 名の方々の熱心な案内・説明と詳細な地図パンフレット、交通安全の声掛けなどのお気遣いを頂いたことに深く感謝を申し上げます。



今回の担当 A グループ 谷、小川、黛、大野